

教育実習生の生徒理解とリフレクションに関する研究

－ 教育実習生へのカンファレンス研修からの考察 －

長友紀子・辰巳喜美・石木雅人・山本浩大

(奈良教育大学附属中学校)

中山留美子

(奈良教育大学 学校教育講座 (心理学))

成田菜津美・奥原牧

(奈良教育大学附属中学校)

A Study : Student understanding and Reflection:

Consideration from the results of Conference Training to Educational Trainee

Noriko NAGATOMO, Kimi TATSUMI, Masato ISHIKI, Kodai YAMAMOTO

(Junior High School attached to Nara University of Education)

Rumiko NAKAYAMA

(Department of School Education Nara University of Education ,Pshchology)

Natumi NARITA, Osamu OKUHARA

(Nara University of Education Junior High School)

要旨：生徒が学校において構築する人間関係は学級集団にとどまらず、教科担当教師との関係、異年齢生徒との関係、学校に関わるそのほかの立場の人間（教育実習生はここに含まれると考えられる）との関係など、様々な形があるという考えに基づいて、異なる立場から生徒に関わる教師で構成したカンファレンスの場を設定した。カンファレンスでの語り合いは、生徒理解につながるとともに、教育実習生の生徒との関わり方や学級経営の捉え方などについての省察を促す効果があることが確認された。

キーワード：教育実習 Educational training

生徒理解のカンファレンス Student Understanding Conference

オンライン研修 Online training

1. はじめに

昨年度、奈良教育大学附属中学校（以下、附属中学校と表記する）では、「教育実習を契機とした学級経営に対する教師効力感の開発とその方法の研究」というテーマのもと実践研究を行った。学級を生徒集団の基本単位と捉え、担任教師がファシリテーターとして生徒に関わる学級ファシリテーションの方法論を用い、学級経営の方法について再検討するとともに、これからの学校で生徒の学びを支える教員となる教員志望学生の学級経営に対する教師効力感（学級経営効力感）の開発とその方法について考察することを目的とするものであった¹⁾。

本研究は、昨年度の研究を継続し、学級を生徒集団の基本単位と捉える前提は確保しながらも、生徒集団の関係性の構築をより緩やかなつながりで捉え、カンファレンスを用いて生徒理解を進めていくことによって、学級

経営に対する視点の変化や教師の行動の変化を促すことができるかを検討するものである。生徒集団の関係性の構築をより緩やかなつながりで捉えるという視点には、生徒が学校において構築する人間関係は学級集団の名だけにとどまらず、様々な形があるという考えが含まれる。

附属中学校で現在行っているカンファレンスは、教師全員で生徒の実態を把握することを目的として、2.1.に示す支援体制のうちの教育相談部が中心となって運営しており、ケース会議に相当するものである。学校全体でのカンファレンスであるため、個別の生徒について時間をかけて話し合う場面にはなりにくいという課題があり、学級担任の抱える学級経営に対する問題の具体的解決方法が見出しにくいのが現状である。

本研究におけるカンファレンスでは、学級を単位として、担任教師、教育実習生が対象生徒について語り合い、より具体的に生徒理解を深めていく。実習生にとっては生徒理解の方法を具体的に経験することによる学びの深

まりが期待されるとともに、現職教師にとっても、学級の生徒について複数の視点から語る場面を持つことによって学級経営について見直す機会となることが予想される。

カンファレンスの場面で、現職教師の語りを聞いたり、実際に自分自身が語ったりすることは、生徒と関わって気づいたことを省察するリフレクションとなると考えられる。さらに、学級経営に関する指導に多くの時間を割くことができない教育実習の現場で、意識的に現職教師と実習生が語り合う場面を設定できれば、昨年度、教育実習を行う学生に対して実施した事前アンケートで見られた、生徒との対人関係や生徒間の問題の解決に対する不安、保護者や同僚教師との関係に対する不安を具体的に解消することにもつながると思われる。

本研究ではカンファレンス時の録音記録、担任教師によるホワイトボードの記述記録、担任教師の実習生の観察内容及び、カンファレンス後の実習生に対するアンケートの結果から考察を行うこととした。

研究の結果、教育実習時にカンファレンスを設定することは、実習生の生徒理解につながるとともに、現役教師にとっても、生徒との関わり方や学級経営の捉え方などについての省察を促すとともに、その後の学級経営の方向性に示唆を与える効果ことが確認された。また、カンファレンスの実施時期については、実習の半ばごろが適切であると考えられた。

本論文の執筆は、附属中学校の支援体制と支援生徒の例を辰巳、カンファレンスの概要を山本、石木が担当し、その他の部分を長友が担当した。

2. 研究の概要

2.1. 附属中学校の支援体制および支援生徒の例

附属中学校では、教育相談体制の充実を図るとともに、大学の次世代教育センターとの連携プログラムである「パスレル」・「エール」などの支援も受けている（表1）。

表1 奈良教育大学附属中学校 教育相談部体制

<役割分担> 校長…教育相談部全体の監督、統括 副校長…教育相談部のスーパーバイズ、運営全体相談 教育相談部部長…教育相談部企画運営、総括 教育相談部副部長…特別支援コーディネーター、職員研修企画（講師選定依頼）、企画運営補助 生活部部長…生活部との橋渡し、連携、職員研修企画、企画運営補助 主幹…放課後学習会運営、支援シート作成 各学年主任…学年生徒の実態把握、支援対象抽出、支援活動の遂行（担任への指示） 養護教諭…スクールカウンセラーとの連携、カウンセラーの窓口
--

前述のような体制で支援を行なっている生徒のうち、3年生のN君を一つの例として様子を示す。本研究におけるカンファレンスでは、不登校傾向の生徒については扱えなかった。実習期間が短期であることと、不登校生徒の情報について実習生に開示することが難しいことなどが理由であるが、実際の教育現場には不登校生徒が一定数いることが予想され、それについても考えていくことが必要になってくる。紙面上ではあるが、具体例と支援方法を示すことで、生徒理解の1つの側面の理解につながればと考える。

N君は「エール」で、支援学生とつながっている一人だ。N君は、文化系のクラブに所属し、仲のよい友人もいて、中学校生活を楽しんでいるかに見えた。ところが、1年の2学期の後半から欠席が増え始め、不登校傾向になった。不登校のきっかけらしいものが何も見当たらず、担任、友人、保護者は対応に苦慮した。不登校傾向は2年生でも続いた。N君が、少しずつ変化を見せたのは、「エール」の支援学生との出会いである。「エール」は、週に一度、附属中学校に支援学生がやって来て、N君と約1時間お話をしたり、学習をしたりする形でサポートを受ける体制になっている。支援開始当初は、N君の気持ち「エール」に向かう様子が見られず、支援学生と会うことができなかった。2年生の初めのころも、「エール」の実施は、あまりなかった。しかし後半には少しずつ回を重ね、「エール」の場で、英語や数学の勉強を教えてもらったり、趣味などの話で盛り上がったりする機会が増えた。支援学生は、N君が、積極的に質問してくれ、心を開いて、笑顔で、いろいろなことを話してくれるのがうれしいと、話してくれた。N君との関係性が、初めの頃よりできてきたと思われる。

今年度に入り、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、オンラインでの「エール」となれ、活動は続いている。

「エール」開始前は、自分で自分の殻から抜け出せずにいたが、支援学生と出会って、回を重ねて関わるようになり、話も弾み、表情もよくなった。また、オンラインの形ででも「エール」でつながって活動している。粘り強い支援学生のサポートが、N君の前向きな変化につながったと言える。（辰巳）

2.2. カンファレンスの方法

今年度の教育実習は、8月31日から9月18日の3週間で行われた。例年は4週間の実習期間であるため、1週間短いことになる。カンファレンスは、実習の最終日の9月18日に実施した。カンファレンスの実施にあたって、実習生が環境に慣れてきたと思われる2週目半ばから、カンファレンスで取り上げた方がいいと判断される生徒を、担任教師から数名あげて、特に観察を行うように指示を出した。7～8日程度の期間であったが、意識的に観察を行わせることで、それぞれの実習生からみた生徒像を語るができるようにした。

研修は、Google Meet のテレビ会議システムで接続する形で、オンラインで行った。3 学年はそれぞれの学年の Classroom に接続し、附属中学校図書館に設置した本部で、奈良教育大学学校教育講座（心理学）の中山留美子准教授と、本校の校長である同大学社会科教育講座（社会学）の渡邊伸一教授の様子を観察していただいた。中山准教授は、昨年度の研究から本校の実践に対してアドバイザーの形で関わっていただいております、学級経営の捉え方や生徒理解の方法について、理論的な側面から助言をいただいております。

カンファレンスは、ホワイトボードミーティングの手法を用い、担任教師がファシリテーターとなって、各学級に所属する実習生が語り合う形式で行った。ホワイトボードミーティングは、岩瀬・ちよんら²⁾によって提案されている学級経営の方法論の一つである、学級ファシリテーションの中で活用されるもので、ホワイトボードに参加者の意見やアイデアを可視化して記録する会議の進め方である。

ホワイトボードミーティングの手法を取り入れた先行研として、佐藤節子による研究がある³⁾。佐藤は、多忙な学校現場の現状に対し、短時間で対応が明確になるケース会議のあり方を実践的に検討し、「ホワイトボード教育相談」と名付けた。ファシリテーションの手法を取り入れた方法となっており、情報を可視化し実際に実施可能な対応策を考えるための方法として有効だと思われる。

ファシリテーションの部分に注目した先行研究には、実政修・竹林地毅による研究がある⁴⁾。この研究は、特別支援教育のケース会議の実践として行われたもので、ファシリテーションを取り入れた教育相談やケース会議の効果について研究し、教師のファシリテーション能力を高める方策を検討している。実政らは、特別支援教育に関わる教師に必要な能力として、「ファシリテーションの技能を教師の養成過程において身に付ける機会を設けるべき」と述べている。

昨年度の本校での研究においても、ファシリテーションの手法を取り入れようと考えた。ここでいうファシリテーションは、学級経営における学級集団に対するものであったが、公開研修講座のワークショップを実践する中で、学級経営及び生徒理解の場面では、複数の人間が多面的に生徒集団や生徒に関わり、課題解決について考えることが重要であることが実感的に感じられ、生徒に向けられる複数の人間の視点を、担任教師がファシリテーターとなって出し合うことは意義のあることだと思われる状況があった。今年度の実践では、担任教師がファシリテーターとなるカンファレンスを実際に行ってみることで、実習生の生徒理解が進むのではないかと考えた。

また、研修はオンラインで行ったため、遠隔で行う教員研修のあり方を実践的に試す機会となった。コロナ禍の状況が今後どのように変化するか見通しの立たない

中、今年度の各国立大学附属学校園の公開授業はオンラインで行われるケースが多くなっている。附属中学校でも、オンラインでの研修や授業公開を求められる機会が増えることが予想され、本研修がその試験的な立ち位置として今後活用されることになるとと思われる。

カンファレンスに使用した ICT 機器は、P C（本部・各学級）、電子黒板、集音マイク、IC レコーダーである。オンライン会議システムには、Google Meet を使用した。カンファレンスの様子は、各学年 1 クラスをピックアップして Meet 録画、IC レコーダーによる音声録画を行った。各学級のホワイトボードは、カンファレンス終了後写真記録を行った。これらの記録と、カンファレンス後に実習生に実施したアンケートの回答について分析を行った。

表 2 は当日の展開である。全体説明を Meet で行ったのち、カンファレンスは学級単位で行った。学級単位のカンファレンスでは、担任教師がファシリテーターとなり、実習生に観察対象生徒について語らせた。担任教師の視点からも該当生徒について語り、複数の視点から生徒の姿を立体的に浮かび上がらせるようにした。カンファレンス後に、学生に対しアンケートを実施した。アンケート項目を表 3 に示す。

表 2 生徒理解のカンファレンス展開

展開	活動内容
全体説明 (10 分) カンファレンス (40 分)	職員室 Classroom で研修内容・ねらいの説明 各学年 classroom に接続。 ・学級生徒について語る ・担任はファシリテーター ・特に観察させたい学級生徒を 1～2 名あげておき、観察から得た生徒像を語らせる。 ・当該生徒の姿を立体的に浮き彫りにする
全体共有 (15 分) 中山先生講評 (20 分) 校長先生より (5 分) まとめ (3 分)	職員室 Classroom でカンファレンスの様子・感想を交流 研修の様子から・講評 全体講評 まとめ 学生のアンケート記入について

表 3 アンケート項目

①学籍番号
②氏名
③カンファレンスという言葉を知っていたか 内容や意味を知っていた 言葉は知っていた

知らなかった

④将来教員となった時、カンファレンスについて学ぶことは必要だと思うか

- 必要だと思う
- あまり必要ない
- 必要ない
- わからない

⑤生徒理解についてどのようなイメージを持っているか（該当する方に○）

- 簡単—難しい
- 必要—不必要
- 担任が関わる—全教員が関わる
- 個人的—集团的

⑥実習中の活動で生徒理解のために役に立ったことは何か（複数回答可）

- 生徒観察 担任教師の観察
- 担任教師とのやりとり
- 学級指導（朝の会・終わりの会・清掃）
- 学級指導（道徳・特活・総合）
- 教科の授業（自分）教科の授業（他の実習生）
- その他（自由記述）

⑦研修を終えてカンファレンスについてどのくらい理解できたと思うか

- 他人に説明できるくらい理解できた
- 自分の中では十分に理解できた
- 大体理解できた
- まだよく理解できていない
- まったくわからない

⑧今後生徒理解についてどのようなことを学びたいですか（複数回答可）

- 生徒観察の方法 生徒理解の用語・方法
- 生徒理解に必要な姿勢 集団の理解の方法
- その他（自由記述）

有効回答数 57

2.3. カンファレンスの概要（学級A）

カンファレンスの中心となった生徒Aは、周りの目線や見方を非常に気にする一方で、自己の行動を他者からの視線で捉えることが難しい生徒である。そのため、自分の行動を他人から指摘されたり、うわさされたりすると腹を立ててトラブルとなるケースが見られた。また、全ての物事を完璧にやり遂げようとする意志が強く、課題が自分の意志とは異なるものとなると、学校を休んだり、家庭で保護者と口論になったりすることが度々見られた。

カンファレンスに参加した実習生は6名で、全ての実習生が本生徒を学級に入った当初から注視していた。生徒Aの授業内外に関わらず自由な行動、積極的に話をしていくこと、他人へちょっかいを出したりしてい

ることが話題になった。これらのことから“学校に対しての不满があるのかもしれない”“他の人に認められたい”“（生徒Aの行動から）見て欲しい”“自分への自信のなさ”“浮き沈みがある”などを、当該生徒から受けたようである。生徒Aの背景については、学校での様子に関係する部分について可能な範囲で説明を行なった。

実習生は「家庭での自分が素直に甘えられる、自分にとっての居場所が確立できていないのかもしれない。自分が中学生の頃を考えると、親の愛情を受けたいという思いがあった。それを感じられていなくて、強い恰好をして、自分の中身を隠したいという思いがあり、生徒Aの気持ちがわかる気がする。」という意見を述べていた。

カンファレンスを通して、生徒Aに対して受けていた印象が大きく変わり、行動と背景を結び付けて考える機会となった。今後、生徒Aが安心して生活していくためには、生徒Aの支えとなっている友人を担任教師が支える一方で、特技などを活かして学級などで他の生徒に認められる機会を設けることが必要であるという意見が述べられた。カンファレンス当初には、実習生は生徒Aの行動のみを注視していたが、背景にある事象と結びつけることで、より一層生徒の行動や発言にはつながりがあることを学んだようであった。（山本）

2.4. カンファレンスの概要（学級B）

カンファレンスで議題が上がったのは、学力も高く、一見すると何も課題がないように見えるが、一方で、物事を批判的に捉え、それを発言するところや、消極的な面が見られる生徒Bである。道徳の授業では、「なぜ道徳ってやる意味あるんですか。どうせ先生が求めている模範的な発言を出し合うだけの時間なのに、こんなことする時間って果たして意味があるんですか。」と発言をしていた。1年時には、あまりそういった要素は表面化せずにはいたが、2年に進級後は不安さを漏らしていたこともあり、注意して見守っていた段階であった。

担任教師から当該生徒を注意して見ておくようにと指示を出し、実習生の観察を促したが、その指示がなければ、生徒Bの抱える課題に気づかないまま終えていた可能性が実習生たちの意見からも見えてきた。

生徒Bについて、ある実習生は「人見知りなだけではないか。仲の良い友達とはよく話し、こちらにも質問をしてくる」と言っていたが、別の実習生は「自分の感情、怒りなどの負の感情を表現するのが苦手なのか下手なのかかわからないが、自分の思い通りにいかないときに地団駄を踏んだりしていた。うまく消化できていないように見える場面を3回ほど見た」との意見を出した。

理科担当の実習生からは、「かなり積極的に動いて、班の中でもリーダーシップを発揮していたので、クラスのリーダー的な存在だと思っていた」とまた違った一面が語られた。理科は生徒Bの好きな教科であった。「そ

ういう立ち位置だからこそ、ネガティブな部分とか、思い通りにいかないと悔しい、うまいこと消化できないっていう点で地団駄踏んだりにつながるのかなと思った」と続けた。

カンファレンスを通して、場面によって生徒Bの見え方が大きく異なるところが共有された。今後の展望としては、生徒Bが得意な分野で活躍する機会を設け、自尊感情を高めることや、集団からの認められ感を感じさせる意見となった。

実習生にとっては、人によって、場面によって見えているものが違うことが実感され、それらをカンファレンスの機会を設けることで、自分の見立てだけでなく、いろんな見立てを知り、生徒理解や対応策の方向性を見出すことができた実践となった。(石木)

2.5. カンファレンスの概要 (学級C)

カンファレンスの中心となったのは、他者とのコミュニケーションに困難さを抱える生徒Cである。生徒Cは、知的好奇心が強く、学習に意欲的で高い学力を持つ一方で、人の気持ちを察することが苦手な生徒である。入学当初から、課題のある生徒として学年全体で向き合ってきた。保護者は生徒Cの課題に対して理解があり、幼少期から丁寧に向き合ってきた。附属中学校や教師に対しても協力的で、情報のやりとりを丁寧に行うことで、個々の事象に対応している状態である。

生徒Cは課題を抱えていることが分かり易い生徒であるため、実習生は実習開始当初から意識していた。観察を促してからは、より丁寧に生徒Cを見守っており、様々な見方がカンファレンスで共有された。数学担当の実習生は、休み時間はよく一人でいると感じ、周りが生徒Cに対して微妙な反応で、浮いているように感じていた。理科担当の実習生は、他の実習生らの話を聞いて「周りに認めてもらえないことが仲間外れにつながると思っているように感じる。生徒Cにとっては、仲間外れはものすごく嫌なことであるので、理解されようと必死になっている。でも、必死になっている時は、周りも微妙な雰囲気になる。周りが認めている時は、生徒Cも必死にはならないし、受容的な雰囲気になっている」と述べた。一方で、社会科の実習生は、「僕は、一人でいるのはあまり見ない。DくんやEくんという。授業中Fさんに話しかけたりして、一人というイメージがなかった」と他の実習生と違う印象を述べていた。ただし、Fさんに話しかけている様子が一方的であったと感じており、他の実習生と共通する見方もしていた。

生徒Cの場合は、関わりのあった実習生全員が、生徒Cの課題に対して共通した認識を持っていた。カンファレンスの最終場面の今後の対応を検討する段階では、共通の見方があったからこそ、意見の深まりが見られた。実習生はそれぞれの考えを、他の実習生の考えと合わせることで、より具体性のある対応策や考えを出

すことができた実践となった。

3. 考察

3.1. カンファレンスの概要及び教育実習生のアンケート調査からの考察

3クラスのカンファレンスの概要からは、生徒を見とっている個々の人間の立場や状況によって見えてくる生徒の異なる様子があるということと、共通する見取りがあった場合には、それぞれの意見の交流によって、生徒への対応策がより具体化し深まっていく、という様子を見ることができた。

学級A、学級Bの実習生には、当該生徒の状況について、個々に観察し、自分なりに見出しつつあった生徒像が、他の実習生から見ると異なった形で現れることに気づいていく様子があった。そこで、自分の見ている生徒像を振り返り、より良い対応策を見出すために、他者の見方を受け入れ、自身の見方を他者と共有していくことの意味について感じていたようである。

学級Cの実習生は、当該生徒の観察と理解が共通する部分が多く、他の2クラスの実習生らとは異なった状況であった。生徒の見取りに共通性を見出した実習生らは、それぞれの立場から考えた対応を出し合い、その効果について対話を深めていた。場面は異なっても、同じような困難さを繰り返し見せる生徒に対し、観察と理解が共有されたことで、当該生徒への対応をより具体的に考えることができていたように思う。

これらの実習生の様子から考察されるのは、短い実習期間であっても、生徒に対する観察を丁寧に行わせ、その結果を共有するカンファレンスの場面を設定することが、実習生の生徒理解や生徒の見取り方を深めることに効果的であると思われるということである。

カンファレンス後の実習生へのアンケートの結果を見ると、項目③に対し、カンファレンスという言葉の内容や意味を知っていた(約8.9%)、言葉は知っていた(48%)、知らなかった(43.8%)で、カンファレンスという言葉自体を知らなかったり、言葉は聞いたことがあっても意味を理解していなかった実習生が全体の約9割だったことがわかった。カンファレンス後の理解度を尋ねた項目⑦に対しては、他人に説明できるくらい理解できた(5%)、自分の中で十分に理解できた(50.8%)、大体理解できた(38.5%)、まだよく理解できていない(5%)、全くわからない(0%)となった。

項目⑤では、実習生の持つ生徒理解へのイメージを確認した。回答に不備があったアンケートを除くと、100%の実習生が難しさを感じており、予想どおりの結果となった。生徒理解を担当が関わるものか、全教員が関わるものかについては、担任が関わるもの(12%)、全教員が関わるもの(77%)と回答(無回答6)し、個人的か集団的かについては両方を選んだ回答も含めて

個人的（26%）、集団的（70%）という結果になった。

アンケートからは、実習生がカンファレンスを実際に経験することで、生徒理解の方法について理解していったことが読み取れた。また、項目⑤を見ると、多くの実習生が生徒理解に関わる人間を広く捉え、生徒理解についても集団として捉えるイメージを持っていることがわかった。

3.2. 成果と課題

カンファレンスの場面で、教師の語りを聞いたり、実際に自分自身が語ったりすることは、実習生にとって、生徒と関わって気づいたことを省察するリフレクションとなっていたように思う。実習生のアンケートの自由記述には、「1人だけではできないことがあるということを理解できた。複眼的に見る中で、自分にできること、役割を考えていくべきだと思った」、「普段から生徒の観察をすることはもちろんであるが、生徒の背景を知ることとも生徒理解の一つと実感できた」などの声があった。また、「学校運営での仕事について、授業以外にもこのようなものがあるのだと知ることができ、大変興味深いものだった。教科によって同じ生徒でも少し違う印象や特徴を挙げていたことから、生徒には様々な側面があることを再認識できた」という記述もみられ、実習生にとってカンファレンスの経験は有意味であったと感じられた。さらに、教師にとっても、複数の視点で生徒を見とることで学級経営の方向性を確かめたり見直したりする良い機会となった。カンファレンスの時期は、今年度は3週間という実習期間であったため最終日になったが、カンファレンス後の実習生の生徒理解の変化を考慮すると、半ばごろに実施するのが適当であろうと思われた。

カンファレンスは各学級をMeetで接続して行なった。今回利用したGoogle Meetは、奈良県の運用するアカウントを利用し、外部からのアクセスが制限される中で行なったが、今後、個人情報を取り扱う活動をオンライン会議システムを利用して共有する場合は、個人情報保護のルールや参加者のモラルの観点など、実施前に慎重に検討する必要があることは留意しておかなくては

ならない点である。対面とオンラインの混合形態の実施であったので、附属学校園と大学との連携や共同授業なども視野に入れ、事例として蓄積して今後活かしていきたい。

最後に、学級経営や生徒理解は難しい内容だが、生徒集団を緩やかなつながりで捉え、複数の人間が理解を共有したり意見を交わしたりしながら向き合っていくことで、今日の学校における学級経営のあり方、生徒理解の方法を実践的に模索していきたい。

謝辞

本研究の実施にあたって、奈良教育大学学校教育講座（心理学）中山留美子准教授には、研究の方法、研修講座の運営においてご指導をいただきました。心より感謝いたします。

注

- 1) 長友紀子・中山留美子・有馬一彦・大谷佳子・山本浩大・辰巳喜美・成田菜津美・奥原牧、「学級ファシリテーションの視点からの学級経営方法の開発－教育実習を契機とした実践の報告－」、奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要、第6号、2020、pp187-192
- 2) 岩瀬直樹・ちょんせいこ（2011）、「よくわかる学級ファシリテーション：信頼ベースのクラスをつくる1」解放出版社
- 3) 佐藤節子、「学校における効果的なケース会議の在り方について：「ホワイトボード教育相談」の試み」、山形大学大学院教育実践研究科年報、第3号、2012、pp23-30
- 4) 実政修・竹林地毅、「ファシリテーションを活かした特別支援教育コーディネーターの実践－校内の特別支援教育に関する委員会（ケース会議）、相談・研修活動の実践から－」、特別支援教育実践センター研究紀要、第16号、2018、pp25-35